【研究報告】

看護学生の正常新生児と早産児への対児感情比較

常田　美和　　小山　満子

【要　　旨】

母性看護学実習および小児看護学実習前の３年生（実習前群）107名、実習後の４年生（実習後群）94名を対象に、正常新生児（以下、新生児とする）と早産児への対児感情を調査した。高校卒業から大学入学までに乳児と接した経験は、「ほとんど接していない」が60.0％以上を占めていた。大学入学までに早産児と接した経験は、「映像で見たことがある」が70.0％以上であった。新生児と早産児への対児感情は、３年生（実習前群）と４年生（実習後群）の間で、有意差はみられなかった。新生児への対児感情と早産児への対児感情を比較してみると、３年生、４年生ともに、接近得点の低下、回避得点・拮抗指数の上昇に有意差がみられた。新生児と早産児への対児感情には正の相関がみられ、新生児への接近感情を高めることは早産児への接近感情を高め、その逆もまた可能であることが示唆された。

【キーワード】　看護学生、新生児、早産児、対児感情、看護学実習

Ⅰ．はじめに

看護学生は、将来親となっていく準備期間にあり、かつ保健医療従事者として母子およびその家族のヘルスプロモーションを実践していくための学習途上にある。母子看護学の学習により知識を豊かにすることは必須であるが、その知識を基盤として対象となる他者への思いやりをもち共感的理解のできる能力を育成していくことが望まれる。また、近年の新生児医療のめざましい進歩により、早産児が新生児期を乗り越えて生存退院する率は増加している。このような視点から、正常な新生児に加え、早産児に対しても理解を深めることは必要かつ重要であると考える。臨床実習場面で、正常な新生児と接するだけでなく、早産児と接する機会を得ることは、学生の対児感情に影響を及ぼしていることが推測できる。看護学生が新生児看護をどのように学ぶことができるのか検討することは大きな課題であると考える。これまでの研究により、看護学生の母性意識、育児性、対児感情には、学生の生育歴や子どもとの接触経験との関連性が見出されている[1)]。また、母性看護学の学習や実習が進むにつれて看護学生の対児接近感情（愛着的、すなわち児を肯定し受容する方向の感情）は高くなる傾向が報告されている[2)~3)]。そこで、母子看護学教育における効果的な指導法を検討するための基礎的データとするため、看護学生の正常新生児と早産児に対して抱く感情（対児感情とする）の変化に着目し、花沢[1)]の対児感情評定尺度を用いて分析を行った。本研究の目的は、看護学生の正常新生児および早産児への対児感情を明らかにすることである。実習前後の学生に調査を行い対児感情について検討したので報告する。

【用語の定義】

新生児：正期産で出生した正常な新生児である。

早産児：早期産で出生した新生児である。

Ⅱ．研究方法

1．対象者

出産・育児未経験の看護学生で、母性看護学実習および小児看護学実習前の３年生（実習前群）と実習後の４年生（実習後群）である。

日本赤十字北海道看護大学　母子看護学講座

2．調査時期

実習前群の調査は、200X年9月に、実習後群の調査は200X年11月に行った。

3．調査方法

1）方法

看護大学生を対象に質問紙による調査を行った。花沢（1992）の対児感情評定尺度を用いた。正常な新生児をイメージした対児感情の調査と、早産児をイメージした対児感情の調査を同時に行った。対児感情は、児を肯定し受容する方向の感情である接近感情（approach feeling)、児を否定し拒否する方向の感情である回避感情（avoidance feeling）を含んでおり、個人のうちに両感情が同居していると考える二次元モデルである。「赤ちゃん」を頭に思い浮かべた時にどのような感じがするかという計28の形容詞による評定表と、「早産の赤ちゃん」を頭に思い浮かべた時にどのような感じがするかという計28の形容詞による評定表を使用した。28の形容詞は比較可能とするため同じ花沢の対児感情評定尺度の項目とした。そのうち、14の接近感情項目の合計得点を接近得点とし、14の回避感情項目の合計得点を回避得点とした。評定は非常にそのとおり＝3点、そのとおり＝2点、少しそのとおり＝1点、そんなことはない=0点の4段階として対児感情の接近項目と回避項目別に得点を算出した。

次に、接近得点と回避得点が個人の中でどの程度拮抗しているのかを表す拮抗指数【拮抗指数＝回避得点／（接近得点＋回避得点）×100】を算出した。この指数は、50以下の低指数になるほど、接近得点のほうが高く、拮抗度は低いが、50以上になるほど回避得点のほうが高いことを意味している。

更に、基本属性として、年齢・性別・乳児および早産児に接した経験内容に関する独自に作成した5項目を質問紙に加えた。①中学生以前に1歳前の赤ちゃんと接したことがあるか、②高校から大学入学までに1歳前の赤ちゃんと接したことがあるか、③大学入学までに早産児と接したことがあるかについて、接し方を4種類提示した中から選ぶよう求めた。

2）分析方法

以上の変数について、母性看護学実習および小児看護学実習前の3年生（実習前群）と実習後の4年生（実習後群）の2群について、新生児および早産児への対児感情について独立したサンプルのt検定（Mann-WhitneyのU検定）を行った。また、各々の学年で新生児および早産児への対児感情の差（Wilcoxon検定）と相関関係（Spearman相関）を検定した。なお、統計処理には統計解析ソフトSPSS14.0J for Windowsを使用した。

3）倫理面への配慮

調査にあたっては、研究者が所属する大学の講座主任に研究計画書を提出し、承認を得た後に実施した。研究対象者である学生の権利を保護するために、以下の内容について口頭および書面をもって説明し、同意を得た上で研究協力を依頼した。

①研究への協力を断ることが可能であり、断ることによる不利益がないこと。

②答えたくない質問には答える必要がないこと。

③データはプライバシーを保護し、研究以外には使用しないこと。

④研究の成果は、統計的に処理され、個人を特定することがないよう配慮すること。

⑤研究の成果は、研究対象者の希望がある場合、その結果を還元すること。

⑥データは研究終了後早期に消去すること。

また、無記名性確保のためアンケート回収箱を設置した。

4）実習中の新生児および早産児と接する期間

母性看護学実習では、病棟実習4日間と分娩・新生児室実習の2～3日間で新生児看護の実習を行っている。小児看護学実習では、1日間のNICU（neonatal intensive care unit:以下NICUと略す）見学実習を行っている。

Ⅲ．結　果

1．対象者の特性

母性看護学実習および小児看護学実習前の3年生（実習前群）は、108名を調査し107名（女子94名、男子13名）より有効回答を得た。平均年齢は20.7±0.9歳であった。実習後の4年生（実習後群）は、95名を調査し94名（女子90名、男子4名）より有効回答を得た。平均年齢は21.8±0.7歳であった。

大学入学までに子どもと接した経験を図１～図３に示した。中学生以前に乳児と接した経験は、３年生では「遊んであげた」が43.9％、「ほとんど接していない」が34.6％であった。４年生では、「遊んであげた」が41.5％、「ほとんど接していない」が42.6％であった。高校卒業から大学入学までに乳児と接した経験は、３年生４年生ともに「ほとんど接していない」が60.0％以上を占めていた。大学入学までに早産児と接した経験は、３年生４年生ともに「映像で見たことがある」が70.0％以上を占めていた。

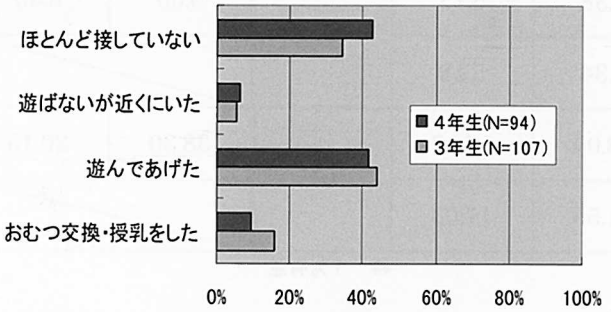

図１　中学生以前　乳児と接した経験

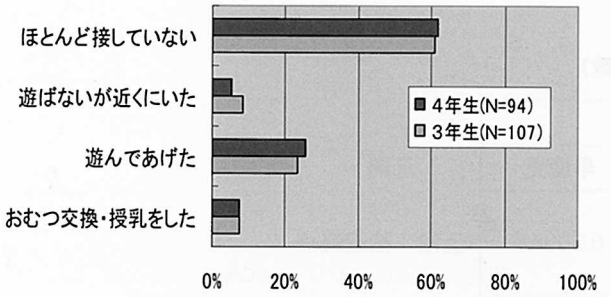

図２　高校から大学まで乳児と接した経験

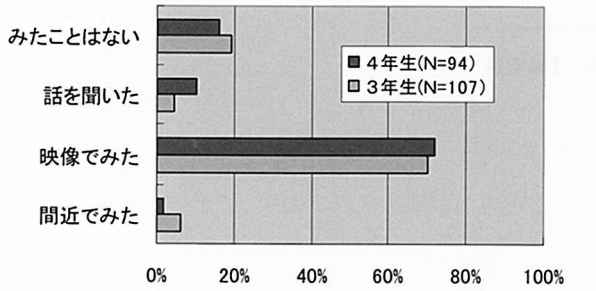

図３　大学までに早産児と接した経験

２．新生児および早産児への対児感情の比較（表１～表２）

新生児への対児感情は３年生（実習前群）よりも４年生（実習後群）の方が、接近得点・回避得点・拮抗指数のすべてにおいて低下していたが、有意差はみられなかった。早産児への対児感情は３年生(実習前群)よりも４年生(実習後群)の方が、接近得点が上昇し、回避得点・拮抗指数ともに低下していたが、有意差はみられなかった。花沢[1]による20～24歳未婚女子大学生と比較してみると、接近・回避得点・拮抗指数の全てにおいて低い値であった。

新生児への対児感情と早産児への対児感情を比較してみると、３年生（実習前群）４年生（実習後群）ともに、接近得点が有意に低下し、回避得点・拮抗指数が有意に上昇していた（表１）。

新生児および早産児への対児感情の相関(Spearman相関係数)をみると、３年生の接近得点では$r=0.448$($p<.01$)、４年生の接近得点では$r=0.502$($p<.01$)であった。３年生の回避得点では$r=0.743$($p<.01$)、４年生の回避得点では$r=0.590$($p<.01$)であった。３年生の拮抗指数では$r=0.431$($p<.01$)、４年生の拮抗指数では$r=0.485$($p<.01$)といずれも正の相関がみられた（表２）。

３．新生児および早産児への対児感情評定尺度各項目（表３）

新生児のイメージを３年生（実習前群）と４年生（実習後群）で比較してみると、「しろい」という接近項目と「てれくさい」という回避項目において４年生（実習後群）に有意な低下($p<.01$)がみられた。早産児のイメージでは、４年生（実習後群）に「すばらしい」という接近項目の上昇($p<.01$)と、「くるしい」、「むずかしい」という回避項目の低下($p<.01$)に有意差がみられた。

新生児と早産児のイメージ比較において、接近項目においては、３年生（実習前群）は12項目、４年生（実習後群）は13項目において有意差がみられた。回避項目においては、３年生（実習前群）は９項目、４年生（実習後群）は７項目で有意差がみられた。

表１　新生児と早産児への対児感情

得点	児	3年生			4年生			花沢[1]による未婚女子大学生（N=540）	
		平均	ＳＤ	Wilcoxon 検定	平均	ＳＤ	Wilcoxon 検定	平均	SD
接近得点	新生児	21.97	7.89	**	21.22	7.86	**	24.60	7.52
	早産児	13.77	7.74		14.05	7.33			
回避得点	新生児	8.41	5.27	**	7.38	5.75	**	9.00	6.40
	早産児	10.75	5.82		9.34	5.18			
拮抗指数	新生児	26.26	15.29	**	23.04	14.17	**	38.30	20.15
	早産児	45.5	18.16		41.55	17.03			

** １％有意

表２　新生児と早産児への対児感情の関係（相関係数）

3年生		4年生	
	早産児		早産児
新生児	0.448**	新生児	0.502**
	0.743**		0.590**
	0.431**		0.485**

凡例
上段：接近得点
中段：回避得点
下段：拮抗指数

** １％有意

表３　新生児と早産児イメージ比較

対児感情項目		新生児		早産児		検定１	検定２	検定３	検定４
		３年生	４年生	３年生	４年生				
接近項目	あたたかい	2.27	2.22	1.38	1.28			**	**
	うれしい	2.37	2.23	1.21	1.36			**	**
	すがすがしい	0.89	0.86	0.61	0.43			**	**
	いじらしい	0.52	0.71	0.68	0.74			*	**
	しろい	0.88	0.54	1.08	0.98	**			**
	ほほえましい	2.72	2.67	1.32	1.45			**	**
	ういういしい	1.94	1.93	1.18	1.30			**	**
	あかるい	1.94	1.71	0.81	0.72			**	**
	あまい	0.91	0.77	0.45	0.56			**	*
	たのしい	2.12	1.88	0.89	0.88			**	**
	みずみずしい	1.33	1.60	0.75	0.77			**	**
	やさしい	1.70	1.47	1.12	1.00			**	**
	うつくしい	1.12	1.09	0.95	0.89				
	すばらしい	1.89	2.13	1.27	1.62		*	**	**
回避項目	よわよわしい	1.53	1.63	2.37	2.36			**	**
	はずかしい	0.27	0.23	0.25	0.21				
	くるしい	0.19	0.22	1.60	1.18		**	**	**
	やかましい	0.58	0.60	0.19	0.21			**	**
	あつかましい	0.07	0.18	0.24	0.13			**	
	むずかしい	1.61	1.39	2.11	1.85		*	**	**
	てれくさい	0.80	0.52	0.43	0.20	*		**	**
	なれなれしい	0.16	0.10	0.07	0.06			*	
	めんどうくさい	0.54	0.50	0.62	0.43				
	こわい	1.05	0.83	1.60	1.56			**	**
	わずらわしい	0.31	0.24	0.27	0.30				
	うっとうしい	0.29	0.20	0.23	0.19				
	じれったい	0.48	0.36	0.49	0.45				
	うらめしい	0.46	0.43	0.22	0.16			**	**

注　検定１：新生児に対する３年生と４年生の有意差（Ｕ検定）　　＊５％有意　　＊＊１％有意
検定２：早産児に対する３年生と４年生の有意差（Ｕ検定）
検定３：３年生における新生児と早産児の有意差（Willcoxon検定）
検定４：４年生における新生児と早産児の有意差（Willcoxon検定）

Ⅳ．考　　察

少子化、核家族化という社会の変化により、親になるまでの準備期間中に自分より幼いものと触れ合う経験の乏しいまま親になる者が増加している傾向にある[4]。このような視点から、母子看護学実習は、現在青年期にある看護学生が子どもを産み育てる準備のための学習や経験の機会としても意義がある。本調査対象者においては、弟妹や甥姪の存在に加え近所の子どもとの交流も含め、中学生以前に乳児と接する機会があった者が、約半数という状況を示している。また、中学生以前に乳児と「ほとんど接したことがない」者の割合は４割前後であり、2003年の教育大学生に対する調査結果[5]と比較して10～20ポイント高い割合である。更に、高校から大学入学までの期間においては、乳児とほとんど接したことがない者の割合は６割以上に増加する。よって、成長するにつれますます乳児と接する機会は減っていくことになる。すなわち、実習場面で初めて乳児と接する者が半数近いことを踏まえると、新生児のイメージ化を図ることは、効果的な母性・小児看護学の学習を展開する上で重要であると考えられる。

本調査対象者の新生児への対児感情は、花沢[1]による20～24歳の未婚女子大学生の調査結果と比べ、接近得点・回避得点・拮抗指数全てにおいて低い値であった。これは、肯定の感情と否定の感情がともに低く、この両方の感情が拮抗している度合いも低いという、やや抑制が効いた状態であると考えられる。石松ら[6]は、看護学生の回避得点・拮抗指数は、他学科学生と比較すると有意に高かったと報告していることから、これは本調査対象者である看護学生の対児感情のバランスにみられる特徴であるといえる。この特徴が、どういう要因と関連があるのか本研究では明らかにできないが、今後更に比較検討していく必要があると考える。

新生児への対児感情は３年生（実習前群）よりも４年生（実習後群）の方が、接近得点・回避得点・拮抗指数のすべてにおいて低下していたが、有意差はみられなかった。これは、母性看護学実習前後で接近得点に有意差がみられなかったという報告[7),8)]と同様の結果である。しかし、同一の研究対象者を縦断的に調査した結果、母性看護学実習後のほうが接近得点は有意に上昇していたとする報告[2),3)]があることから、今後は縦断的調査を継続し接近感情の変化を捉えていくことが必要と考える。回避得点に関しても同様に、母性看護学実習を通して直接新生児と接することで否定的なイメージが低下したという報告[9)~12)]がある。この点に関しても、本調査では明確にならなかったため、同一の研究対象者を引き続き調査し明らかにしていきたいと考える。

早産児への対児感情は３年生（実習前群）よりも４年生（実習後群）の方が、接近得点が上昇し、回避得点・拮抗指数ともに低下していたが、有意差はみられなかった。看護学生の実習時の低出生体重児に対するイメージ調査[13)~15)]では、否定的な傾向が強くみられている。また、大久保ら[16]による調査でも、NICU実習後の対児感情は、接近得点が低下し拮抗指数が上昇しており、本調査でみられた傾向とは異なっている。 早産児に関しては、大学入学までに「映像でみた」者が70％以上を占めており、テレビなどの映像を見た経験が、個々の学生の中で意味づけされ、早産児に対するイメージを形成していると推察できる。その経験をベースに、実習で「実際に見る」ことを通してイメージを変化させていると考えられる。中村[17]は『臨床の知』は、諸感覚の協働に基づく共通感覚的な知であると述べている。同様に、NICUにおいて学生は、自身の感覚を総合的に駆使することによって早産児という存在を認識する学びの場にいると考えられる。更に、その際自らの経験や学習を想起しつつ周囲の状況からの情報を絶え間なく参照しつつあると思われる。このような学生の複合的な感覚を活用した学びに対して、更に看護としての意味づけが深められるような新生児看護教育の検討が必要であると考える。

新生児への対児感情と早産児への対児感情を比較してみると、３年生（実習前群）４年生（実習後群）ともに、回避項目よりも接近項目において、より新生児と早産児への感情の差を明確に感じている傾向がみられた。接近感情が高く回避感情が低い者は、他人に対する関心、感受性、共感性などが高かったと報告[1]されていることから、接近感情を高めていけるような教育は重要である。本調査より新生児と早産児への対児

感情には、正の相関がみられたことから、新生児への接近感情を高めることは早産児への接近感情を高め、その逆もまた可能であることが示唆された。新生児および早産児に関心をよせ、知ろうとすることは、児を１人の発達途上にある人間として尊重する上で重要である。今後は、早産児を含めた新生児に関する一貫性、統合性のある新生児看護教育プログラムの検討が必要という岸田ら[18]の提言を検討していくことも重要な課題であると考える。

Ⅴ．おわりに

看護大学生二学年のみの調査結果であるが、新生児と早産児への対児感情の違いが示された。今後は、同一の研究対象者を縦断的に調査し、学習者の特性に適した新生児看護教育プログラムを検討していく必要がある。

謝　辞

本調査にご協力いただきました学生の皆様に感謝申し上げます。

なお、本研究は平成18年度財団法人日本赤十字社看護師同方会看護研究助成金を受けたものの一部である。

Ⅵ．引用文献

１）花沢成一：母性心理学第１版、61-88、東京、医学書院、2001

２）大槻優子：女子看護学生の母性意識の変化１年次後期から３年次母性看護学実習終了までの経年的変化、母性衛生Vol.45No.1、118- 125、2004

３）伊藤道子：母性看護学実習が看護学生の母性意識の発達に与える影響、母性衛生Vol.38No.1、25-33、1997

４）中央審議会：少子化と教育について（報告）、2000（Web公開資料：文部科学省答申 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/chuuou/toushin/000401.htm）

５）大滝まり子：教育大生の保育者観、子ども観、北海道文教大学研究紀要Vol.28、105-114、2004

６）石松直子、江藤節代、山本捷子：大学生のもつ育児イメージと対児感情- 看護学科学生と他学科学生との比較、日本赤十字九州国際看護大学紀要２、145-154、2003

７）土井久子、大槻優子：母性看護学実習と母性意識の変容- 花沢の対児感情評定尺度・母性理念質問紙を用い実習前後の対児感情・母性意識の測定から、順天堂医療短期大学紀要4、50-58、1993

８）小島照子、池田浩子、米丸香里：学生の母性意識に関する研究（１）母性看護学実習との関係、三重大学医療短期大学紀要6、21-28、1997

９）坂梨薫、加藤千晶、小城原新：母性看護学実習が母性意識の発達変容に及ぼす影響　女性に対する態度尺度および母性理念質問紙の調査から、母性衛生Vol.37No.1、135-144、1996

10）森下節子：看護学生の母性意識の発達- 母性看護学実習にみる意識の変容、母性衛生Vol.33No.3、297-303、1992

11）大槻優子、東亜紀、野田洋子：女子看護学生の母性意識と母性看護学学習との関連、順天堂医療短期大学紀要14、65-74、2003

12）和田佳子、今津ひとみ、大石武信他：看護学生の対児感情に及ぼす母性看護実習の影響、日本心理学第63回大会発表論文集、895、1999

12）大久保明子、福原紀、秋山啓子他：NICU見学実習による対児感情の変化、第31回日本看護学会論文集(看護教育)、15-17、2000

13）橋本朝美、大橋千恵子、小田原良子他：特殊新生児室の臨床実習での学生の学び、第18回日本看護学会論文集(看護教育)、9-11、1987

14）中川文子、立石里美、山田静子他：教育課程の異なる３校学生のNICU実習に対する認識について、第24回日本看護学会論文集(看護教育)、119-121、1993

15）本間昭子、小柳恭子：NICUでの見学実習と実践を中心とした実習が及ぼす影響- 低出生体重児のイメージ・低出生体重児看護に対する意欲の比較、看護教育の研究Vol.10、265-281、1995

16）大久保明子、福原紀、秋山啓子他：NICU見学実習による対児感情の変化、第31回日本看護学会論文集(看護教育)、15-17、2000

17) 中村雄二郎：臨床の知とは何か、135-136、
岩波新書、1992
18) 岸田佐智、草野美根子、横尾京子他：新生児看護
教育に関する文献的考察、
Quality NursingVol.5No.11、12-22、1999